

【特別・嘱託・協同研究員】

人口減少地域における宗教施設の役割に関する 予備的検討

—岐阜県揖斐川町春日美東におけるアンケート調査より—

磯部 美紀・阿部 友香

1. はじめに

大谷大学真宗総合研究所・一般研究木越班「人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究」（科学研究費助成事業・基盤研究（C）、21K00075）はこれまで、人口減少地域を対象にその地域の宗教動態（宗教意識や宗教的役割の動揺や変容）と当該地域における寺院の社会的役割について研究を行ってきた。2017年度より岐阜県揖斐郡揖斐川町春日において、寺院関係者へのインタビューを行い（「新しい時代における寺院のあり方研究」2017～2019年度）、2020年度は新型コロナウイルス感染症の流行により、ビデオ通話アプリケーションを用いた他出者へのインタビュー調査を実施し（阿部・野村・丸山2022）、2021年度は揖斐川町春日美東の在住者を対象に「地域と寺院に関するアンケート調査」を行った。また、アンケート回答者の一部に対して2022年6～9月に追加の聞き取り調査を実施した。

本稿では、「地域と寺院に関するアンケート調査」によって得られたデータを分析することを通じ、人口減少地域における伝統宗教及び宗教施設の社会的役割を、岐阜県揖斐川町春日地区美東地域を例に考察する。尚、分析の過程でアンケート協力者の一部に対して実施したインタビュー調査のデータも補足的に用いる。本稿が分析の対象として取り上げるのは、上記アンケートによって得られた、地域住民および地元を離れた「他出家族（地域住民のきょうだい・子）」が当該地域の宗教施設（寺院・神社）を訪問する機会についてのデータである。本データを分析することを通じ、当該地域における宗教行事や宗教施設は人々（住民及び他出家族）が集う機会や場を提供していることを明らかにしたい。

2. 先行研究の整理

本論に入る前に、人口減少地域における宗教施設に関する研究の動向を整理したい。先行研究には、全国的に宗教施設の状況を調査したもの、地域における神社と寺院のあり方の違いに着目したもの、宗教研究分野における行事と地域の関わりについて扱ったもの、人口減少地域における宗教施設の護持を取り上げたものがある。

まず、人口減少地域における寺院と神社を対象に全国的な動向を分析した研究を確認する。寺院の実態に関する主な研究としては、櫻井・川又編（2016）や相澤・川又編（2019）が挙げられる。これらはそれぞれ、寺院関係者（住職や寺族）を対象に行った量的調査に基づき、宗教者側の視点からみた寺院の現状を把握することに主眼が置かれた研究である。神社に関するものとしては、石井（2015）や冬月（2019）が挙げられる。石井（2015）は、日本創生会議によって公表された消滅可能性自治体に所在する神社数を算出しており、その数は神社全体の約4割にのぼると指摘している。冬月（2019）は、量的・質的調査および事例調査をもとに、地域における神社の変化と過疎化との関連がどのようなものか明らかにしている。加えて冬月は、神道と過疎化に関する研究史をまとめる中で、昭和50年以降は祭りと社会変動の研究に中心が移っていったことを指摘している（冬月2019：19）。

次に、地域における神社と寺院のあり方の違いに着目したものを確認する。多田・横田・飯田・伊丹（2021）は、三重県熊野市を対象に神社と寺院の日常的な維持管理や祭りなどの行事運営に住民がどのように参画しているかを調査し、神社と寺院とではその関与者が異なる傾向があると指摘している。すなわち、神社は、地域（氏子）で日常的に維持管理され、行事の際も各地域で準備し実施している。それに対し寺院は、地域の檀家によって維持管理されており、関与者は檀家と親族である。盆や彼岸などの行事は主体となる親族が準備を行い実施している（多田・横田・飯田・伊丹2021：1896）。他方、伊藤・窪田・大竹（2016）は幼少期の生活空間における寺院・地蔵菩薩・神社の有無を操作変数としてソーシャル・キャピタルとの相関を分析し、有意な影響があることを明らかにした上で、神社は地縁というソーシャル・キャピタルを高め、寺院は血縁というソーシャル・キャピタルを高める可能性があるとは指摘している（伊藤・窪田・大竹

2016 : 103)。

続いて、宗教研究分野における行事と地域の関わりについて確認する。宗教研究分野においては、宗教行事（寺院行事）に焦点が当てられる（川又 2023; 高橋 2005）。例えば高橋（2005）は、寺院行事について「原則として寺院において執り行われ、定期的で開催され、住職が導師を務めはするが、特定の一檀家のための導師としては位置づけられてはいないもの」と定義した上で（高橋 2005 : 30-31）、寺院行事の性格毎に4つに分類している。第1に檀家の死者や先祖を供養する行事、第2に仏教・各宗派の成立やアイデンティティに深く関わる行事、第3に村落における共同祈願の性格を持つ宗教行事・講活動、第4に近年新たに行われるようになったコンサートや講演会等の行事の4つである。高橋による寺院行事の分類に従えば、地域に関わる行事は3つ目のみである。

最後に、宗教施設の護持と「他出家族」に関する研究を確認する。中條（2017）は、老親が地元で生活し子どもが他地域へ転出する「他出子¹⁾」に注目することで、寺檀関係の持続可能性を検討している²⁾。また徳田（2018）は、比較的近郊に他出した門徒とその子や孫世代との関係強化を軸にした広域的な寺院・地域護持の可能性を提示している³⁾。関係人口論を基礎にした「他出家族」への注目は、人口減少地域における宗教施設の存続可能性や護持のみならず、地域での生活を維持する方策を検討する上で重要な視点だといえる。

ここまで人口減少地域における宗教施設の役割に関わる先行研究を概略してきたが、これらを踏まえて、ここでは本稿の射程について、研究対象と分析の視点に注目して3つの観点から示す。第1に、寺院あるいは神社のどちらか一方のみを研究対象とするのではなく、地域における重要な宗教施設としての寺院と神社に焦点をあて、人口減少地域において果たす役割に関して両者の共通点や差異を明らかにする。第2に、これまで本研究班が主に調査してきた宗教者側（寺院）ではなく、地域の生活者およびその他出家族の動向に注目して分析する。第3に、宗教施設に注目する際には、非日常的な関わり（行事や祭りなど）のみならず日常的な関わりもあり様も含めて検討する。これにより、広く地域における宗教施設の役割を捉える。

3. 調査の概要

3-1 調査対象地域の概況

岐阜県揖斐川町春日地区は、岐阜県南西部の山間に位置し、伊吹山を挟んで滋賀県米原市に接する。揖斐川の支流である粕川が形成した谷沿いの地域である。2005年1月、春日村・揖斐川町・谷汲村・久瀬村・藤橋村・坂内村が合併し、(新)揖斐川町が誕生した。春日地区は、六合地域・中央地域・美東地域の3地域からなるが、本稿で焦点をあてるのはこのうち美東地域である。



図1 調査対象地域

【出典】岐阜県社会福祉協議会 HP
ヤマシヨウ株式会社 HP

春日地区では、かつては地勢を活かして、林業や炭焼き、真綿の生産、薬草や茶の栽培などが盛んに行われてきた。しかし、高度経済成長期以降、若年層を中心に粕川下流の平野部にある旧揖斐川町や池田町、大垣市等へ人口が流出し、人口減少と高齢化が進んだ。春日地区の人口は、2015年の国勢調査では419世帯・932人であったが、2019年7月末には371世帯・900人となり、世帯数と人口はともに減少傾向にある。2018年時点での高齢化率は、六合地域45.5%、中央地域63.1%、美東地域57.8%である。

春日地区は、17世紀初頭に東本願寺を創立した東本願寺第12代教如上人ゆかりの地であり、真宗大谷派の寺院が数多く見られる。当地区に所在する仏教寺院11ヶ寺のうち9ヶ寺が真宗大谷派の寺院である。浄土真宗の一特徴として、伝統的に「講」という組織と深く関わって宗教活動を展開してきたことが挙げられ

る。講は村落のあり方や信仰のあり方を人々が確かめ合う場として大きな役割を担ってきた（木越・東館・山下・徳田・藤枝・藤元 2018：15-16）。春日地区では、教如上人との関連が深い「五日講」と呼ばれる講の活動が現在も行われており、その歴史は400年近くになる。五日講では、毎月5日の教如上人の命日に、講に属する寺院8ヶ寺が持ち回りで会場となり、法要が行われている（木越・東館・山下・徳田・藤枝・藤元 2018：16-17）。また五日講のみならず、寺院を会場として「報恩講⁴⁾」や「永代経」といった年中行事も行われている。祥月命日や月命日に読経する「永代経」は、教義において死者（先祖を含む）の追善供養を否定する浄土真宗の場合、仏恩に報い信仰を喜ぶために行う（総合佛教大辞典編集委員会編 2013：578）。しかし、美東地域の真宗寺院C寺の住職は、2019年時点の聞き取り調査の際に、永代経とは「お寺が永代にわたって故人をお守りしますの意」である、と語った。この地域において永代経は、死者への追善供養ではなしに、死者を縁にしながらかつて仏法を伝える寺院が永代にわたり続いていくことを意図して営まれていると言えよう。秋の永代経、なかでも紙芝居を用いて説法を行う日には50名ほどの参加者があった（2019年9月2日C寺住職への聞き取り調査）。さらに、真宗地域と言える美東地域の現在の墓制の特徴として、各寺院に境内墓地はなく、屋敷地や畑などに墓があることから、門徒が墓参りのついでに寺院を訪れるという姿は想定しにくいことが挙げられる（本林・磯部 2020：1-8）。

次に、岐阜県揖斐川町春日美東における寺院と神社の分布を確認しておく（春日村史編集委員会 1983：652-672、730-760）。

表1 美東地域における地区ごとの寺院・神社の分布

地区名	寺院	神社
種本	発心寺（真宗大谷派）	六社神社（郷社）
中瀬	長光寺（真宗大谷派）	
寺本	閑窓寺（真宗大谷派）	六社神社（村社）
中郷	西藏寺（真宗大谷派）	熊野神社
尾西	法性寺（真宗大谷派）	白山神社

美東には各地区に寺院と神社がそれぞれ立地している⁵⁾（表1）。ただし注意したいのは、寺院に関わる活動においては、地区ごとに明確な境界線が引かれているわけではなく、美東地域内での緩やかなつながりが見られる点である。例えば、かつては葬式や法事の際には、手次寺（菩提寺）の住職だけではなく、法

中として、美東地域の他の真宗寺院の住職も招かれていた（本林・磯部 2020：11）。また、前述の五日講においては、講に属する各寺院の門徒の代表が「参り番」となって、手次寺のみならず春日地区内の他の真宗寺院を会場に行われる五日講にも参加する（木越・東館・山下・徳田・藤枝・藤元 2018：17）。

3-2 調査の方法

「地域と寺院に関するアンケート調査」によって得られたデータの分析に移る前に、本アンケート調査の実施方法を示しておく。2021年12月上旬に調査協力依頼はがきを揖斐川町春日美東の全79世帯に送付し、その1週間後に調査協力依頼状と調査票および返信用封筒を同封して送付した⁶⁾。送付にあたっては郵便局の「はがきタウン」、「タウンプラス」⁷⁾のサービスを利用した。2022年1月末を期限に返送を求め、30の回答を得た（回収率38.0%）。

調査票は各世帯1名が匿名で回答する形式であり、調査時に美東在住で、各世帯で最も長く美東に在住している方が回答するように依頼した（代筆も可とした）。主な質問項目は、「回答者の属性」、「同居家族について」、「寺院との関わり」、「神社との関わり」、「他出家族について」、「寺院や神社に対する思いや不安」である（末尾資料「調査票」参照）。寺院や神社との関わりのうち、訪問機会や頻度の質問については新型コロナウイルス感染症流行以前（2020年2月以前）の状況を想起するように但し書きを付けた。また最後に追加調査への協力意向を尋ねる項目を設け、協力が可能な場合は氏名と連絡先を記入してもらった。追加調査への協力に対する回答は11名から得られ、うち9名に対して2022年6～9月に対面、電話、ビデオ通話アプリケーションによる聞き取りが実施された。本稿ではこれらの聞き取り調査データも補足的に用いる。

4. アンケート調査の結果と分析

本章では、「地域と寺院に関するアンケート調査」の集計結果を示し、それらをもとに分析を行う。

4-1 回答者の属性・同居家族・他出家族

ここでは、アンケート回答者の基本属性（性別・年齢）、同居家族について（世帯構成・世帯人員、年齢分布）、他出家族について（続柄・年齢分布・居住

地・帰省頻度)の順に、それぞれ結果を示していく。

まずは、アンケート回答者の属性をみていく。回答者の性別は、男性 50.0% (14 人)、女性 50.0% (14 人) であった。

表 2 は回答者の年齢の分布を示したものである。表 2 より、80 代が 33.3% (10 人) と最も多く、次いで 70 代が 26.7% (8 人) であった。回答者のうち、最高齢は 100 歳、最年少は 46 歳、平均年齢は 74.7 歳 (標準偏差 13.0) である。高齢者が多くを占めるが、比較的若い年代 (40 代、50 代) からの回答も 20% あった。

表 2 回答者の年齢

年代	人数	割合
40～49 歳	2	6.7%
50～59 歳	4	13.3%
60～69 歳	2	6.7%
70～79 歳	8	26.7%
80～89 歳	10	33.3%
90～99 歳	3	10.0%
100 歳以上	1	3.3%
合計	30	100.0%

続いて、アンケート回答者とその同居家族についてみていく。アンケート回答者の世帯構成について、総務省統計局のホームページに記載されている「世帯の種類」の区分に基づいて示すと、単身世帯の割合が最も高く、全体の 37.0% を占める。次いで、子と同居している世帯が全体の 33.3%、夫婦のみの世帯が 29.6% と続く。このうち、高齢単身世帯 (65 歳以上の人一人のみの一般世帯) が単独世帯全体の 90.0% を占める。また、高齢夫婦世帯 (夫 65 歳以上、妻 60 歳以上の夫婦 1 組のみの一般世帯) は、夫婦世帯の 87.5% となる。

世帯人員については、「1 人」が最も多く全体の 37.0% を占め、次いで「2 人」が 33.3%、「3 人」が 14.8%、「5 人」が 11.1%、「4 人」が 3.7% と続く。一世帯当たりの人員数の平均は、2.15 人である⁸⁾ (標準偏差 1.28)。

美東在住者、すなわち、アンケート回答者および同居家族について、10 歳ごとに区切って年齢分布を示すと、図 2 の通りになる。70 代と 80 代の割合が顕著に高く、それぞれ 21.1%、24.6% であり、それらを合わせると全体の約半数を占める。

さらに、美東在住者について年齢三区分にに基づき示すと、年少人口（0～14歳）が8.8%、生産年齢人口（15～64歳）が31.6%であり、老年人口（65歳以上）が最も高く、全体の59.6%を占める。本アンケート調査の結果において、美東在住者の最高齢は100歳、最年少は1歳、平均年齢は61.9歳（標準偏差25.3）であった。

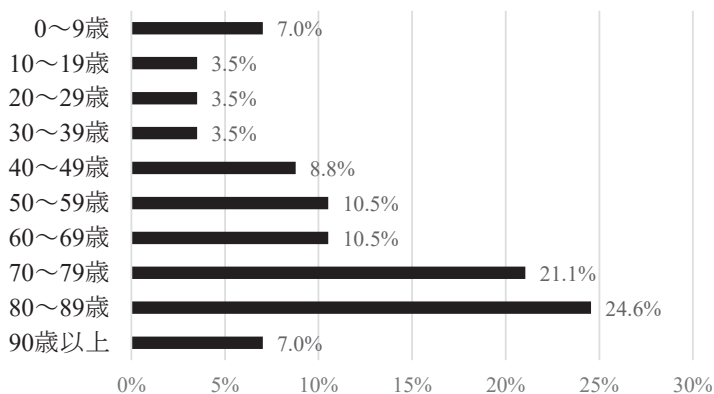


図2 美東在住者の年齢分布

続いて、他出家族について示していく。本アンケート調査では、アンケート回答者本人からみた同居していない「きょうだい」と「子」について尋ねることにより「他出家族」を析出した。回答者からみた他出家族の続柄は、「兄・弟」が19.2%、「姉・妹」が19.2%、「息子」が19.2%、「娘」が34.6%、「子（性別不明）」が7.7%である。また、続柄別に他出家族の年齢分布を示したのが表3である。

表3 他出家族の続柄別年齢分布（人数、割合）

年齢	きょうだい		子		続柄不明	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
20～29歳	0	0.0%	1	3.6%	0	0.0%
30～39歳	0	0.0%	4	14.3%	0	0.0%
40～49歳	1	5.0%	8	28.6%	0	0.0%
50～59歳	3	15.0%	9	32.1%	1	25.0%
60～69歳	4	20.0%	5	17.9%	1	25.0%
70～79歳	9	45.0%	1	3.6%	1	25.0%
80～89歳	3	15.0%	0	0.0%	1	25.0%
合計	20	100.0%	28	100.0%	4	100.0%

きょうだいに関しては、最も多いのが「70～79歳」の45.0%であり、次いで「60～69歳」の20.0%、「50～59歳」と「80～89歳」の15.0%が続く。子の年齢分布は多い順に示すと、「50～59歳」の32.1%、「40～49歳」の28.6%、「60～69歳」の17.9%となる。他出家族の最高齢は81歳、最年少は28歳、平均年齢は57.6歳（標準偏差13.7）である。

次に、他出家族の居住地を示す。本アンケートでは他出家族の居住地域を自由記述形式で尋ねている。エリアごとに集計しなおすと表4のようになった。

表4 他出家族の居住地

居住地	人数	割合
旧春日村内	1	2.1%
揖斐郡内	20	42.6%
西濃地域内	7	14.9%
岐阜地域内	9	19.1%
中濃地域内	2	4.3%
東海地方	5	10.6%
その他	3	6.4%
合計	47	100.0%



図3 岐阜県の地域区分

【出典】岐阜県産業環境保全協会 HP

調査対象地域である春日美東から自動車ですら30分程度のところにある「揖斐郡内（旧春日村内を除く、揖斐川町、大野町、池田町）」が最も高い割合を占め、全体の42.6%にのぼる。次いで、県庁所在地の岐阜市を含む「岐阜地域内」の19.1%、岐阜市の次に人口が多い調査対象地域の近隣中核都市である大垣市をはじめとする「西濃地域内（揖斐郡内を除く）」の14.9%が続く。また、「東海地方」は10.6%であり、「その他」の地域としては、北海道、長野県、奈良県の回答があった。

他出家族の帰省頻度は、表5の通りである。「半年に1~2回」が最多

表5 他出家族の帰省頻度

帰省頻度	人数	割合
ほぼ毎日	0	0.0%
週1～2回	3	5.9%
月1～2回	14	27.5%
半年に1～2回	18	35.3%
年1～2回	9	17.6%
来ない	7	13.7%
合計	51	100.0%

で35.3%を占め、次いで「月1~2回」の27.5%、「年1~2回」の17.6%が続き、「来ない」は13.7%である。このように、年1~4回の頻度で帰省する他出家族が過半数にのぼるほか、より高い頻度で帰省を行っている者も少なくないことが分かった（毎月・27.5%、毎週・5.9%）。

4-2 寺院・神社との関わり

ここからは、地域住民（回答者本人）と他出家族それぞれの寺院・神社との関わりをみていく。図中の棒グラフの上段は回答者本人の、下段は他出家族のデータを表す。また棒グラフは、回答者本人による回答の割合が高い項目の順に並べて示す。

4-2-1 寺院・神社への訪問機会

ここでは寺院・神社への訪問機会について、アンケート調査の単純集計を示す。まず、回答者本人の寺院訪問機会を尋ねるべく、「あなたはどのような機会にお寺やお参りに行きますか」と、12個の選択肢を用意して質問し、該当するものすべてを選択してもらった。その結果を示したのが図4である。「報恩講」

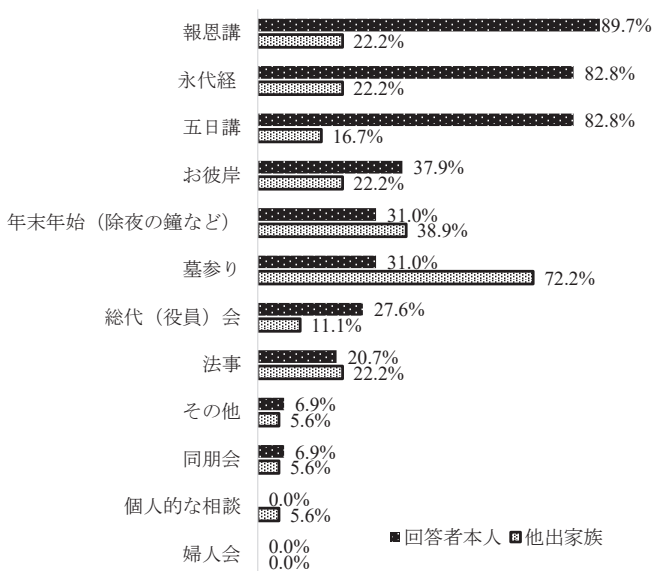


図4 寺院への訪問機会（複数回答）

の89.7%が最多であり、「永代経」と「五日講」の82.8%が続くという結果になった。このように回答者本人の場合は、「報恩講」や「永代経」、「五日講」といった寺院行事の際に訪問するという回答が全体の8割以上を占め、他の項目に比べて著しく高い数値を示している。続いて多いのは「お彼岸」の37.9%である。また、「年末年始（除夜の鐘など）」と「墓参り」は31.0%、「総代（役員）会」は27.6%と、それぞれ3割程度の回答者が訪問している。「法事」は20.7%、「同朋会」は6.9%、「個人的な相談」と「婦人会」はともに0%であった。

次に、「美東を離れたご家族は、帰省時、どのような機会にお寺やお参りに行きますか」と尋ね、13個の選択肢⁹⁾の中から該当する項目すべてを選んでもらった。図4から分かる通り、他出家族に関しては「墓参り」が最多であり、72.2%の他出家族が実施している。次いで高いのは「年末年始（除夜の鐘など）」の38.9%である。「報恩講」、「永代経」、「お彼岸」、「法事」はいずれも22.2%であり、2割程度の他出家族が参加している。「五日講」は16.7%、「総代（役員）会」は11.1%で、他の項目と比べて割合としては高くはないものの、一部の他出家族が寺院を訪問する機会になっている。「個人的な相談」は5.6%であった。

回答者本人の寺院訪問機会への着目により指摘できることは、第1に、「報恩講」、「永代経」、「五日講」の参加率が高く、「お彼岸」の参加率が低いことである。3-1の地域概要で確認したように春日地区が歴史的に見て浄土真宗と深く関わりのあった地域であることは、真宗の儀礼として重要な「報恩講」や「五日講」への参加者が多いことの理由として考えられる。他方、「永代経」と「お彼岸」は、家の系譜に属する死者を縁にして営まれる寺院行事という意味で類似するが、参加率には大きな違いが見られる。この差異の背景として行事ごとに門徒の参加意図が異なる可能性が考えられるが、これについては今後、門徒を対象にした聞き取り調査によって明らかにしていきたい。第2に、回答者本人による「墓参り」は30%台に留まることである。これは美東地域の墓制に関連すると考えられ¹⁰⁾、墓の立地場所が寺院ではない場合には、墓参りの実施と寺院への訪問が必ずしも結びつかないのである。

他出家族については、次の3つの特徴が挙げられる。第1に、回答者本人による参加がある項目は、他出家族による参加も一定程度見られることである。「婦人会」を除くいずれの機会においても、他出家族による訪問がある。第2に、「報恩講」・「永代経」・「お彼岸」・「法事」の参加率には差がなく、いずれも横並

びであり、「五日講」の参加率もこれらをわずかに下回る程度であることは、回答者本人の回答傾向とは異なる¹¹⁾。寺院で営まれる行事への他出家族の参加率は、突出して高くなる行事があるというよりは一様であるといった特徴が見られる。第3に、「個人的な相談」については、回答者本人が0%なのに対して他出家族の場合は5.6%とわずかながら行われている。ただし、具体的な相談内容については本アンケートから知ることはできない。

次に、神社への訪問機会について見ていく。回答者には、「あなたはどのような機会に神社を訪れますか」と問い、9個の選択肢から該当するものすべてを選択するよう求めた。その結果が図5の棒グラフ上段である。

回答者本人の場合は「お祭り」の78.6%が最も高い割合を占める¹²⁾。次いで多いのは「日常の参拝」であり、39.3%が特定の行事等とは関係なく、日常的に神社に赴いている。その他の個人的な参拝機会については、「初詣」が32.1%と多く、「願掛け」は10.7%、「厄払い」は7.1%であった。人生儀礼に関する項目では「お宮参り」が32.1%、「七五三」は3.6%だった。また、「役員会」は32.1%であり、「初詣」や「お宮参り」と並ぶ割合だった。

他出家族については、「美東を離れたご家族は、帰省時、どのような機会に神社を訪れますか」と尋ね、10個の選択肢¹³⁾の中から該当する項目すべてを選ん

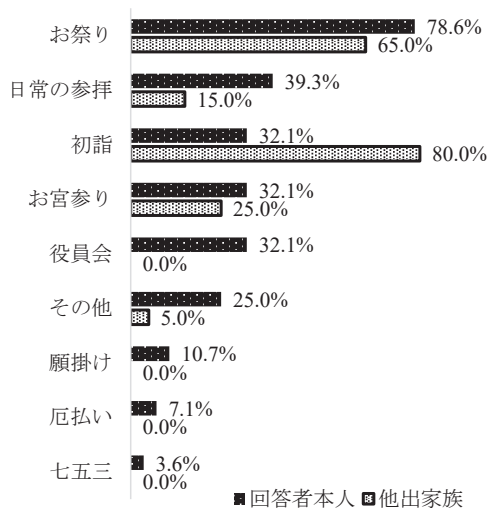


図5 神社への訪問機会（複数回答）

でもらった。図5の棒グラフ下段より、他出家族の場合は、「初詣」80%が最も多く、年末年始に帰省し神社へ訪問することが多いと分かる。次に多いのが「お祭り」65%であり、「お宮参り」25%、「日常の参拝」15%、「その他」5%と続く。「七五三」、「厄払い」、「願掛け」、「役員会」については回答が無かった。

この結果から、回答者本人と他出家族とが神社へ訪問する機会の違いが見えてくる。回答者本人については、全ての項目で回答があることから年中行事や人生儀礼、個人的な参拝など様々な機会に地域の神社を訪れていることが分かる。そして他出家族は、年末年始など、帰省に合わせて神社を訪問していることが分かる。ただし、他出家族については、神社への訪問が帰省のきっかけとなる場合もあることに注意が必要だ。例えば、「お祭り」はその最たるものであろう。帰省に合わせて神社を訪問するのではなく、「お祭り」に合わせて帰省しているのである。また、回答者本人と他出家族で違いがみられた項目のうち、子どもの出生・成長に関わる行事である「お宮参り」と「七五三」にも注目したい。回答者本人の場合は、「お宮参り」も「七五三」もどちらも神社訪問の機会となっている。一方で他出家族の場合は、美東地域の神社で「お宮参り」を実施する者はいないものの、「七五三」の際に訪問する者はいないという結果となった。お宮参り（初宮参り）は出生に関わる行事であり、子とその両親（父方）の祖父母が付き添うものとされている。『民俗学事典』によれば、お宮参りでは祖母が子を抱き、健やかな子の成長を願って神社に詣でるという（刀根 2014：284-285）。一方、七五三は子の成長を祝う行事ではあるが、祖父母の参加を必要とするわけではない。両行事の異なる性質から、お宮参りは他出家族の帰省のきっかけとなっているが、七五三は帰省のきっかけとはなっておらず、今回のアンケート結果の差異として表れたと考えられる。

4-2-2 「個人・家族」と「地域や組織」に関わる寺院や神社

ここからは、宗教施設への訪問機会に注目することによって、人口減少地域における宗教施設の役割について考察していきたい。そのためにまず、寺院・神社への訪問機会を尋ねる際に用意した選択肢について、以下の2つのカテゴリーに分類する。すなわち、「個人・家族に関わるもの」と「地域や組織に関わるもの」の2つである。各選択肢の分類は表6の通りである。

4-2-1 で検討した回答者本人と他出家族の宗教施設への訪問機会を、表6の分

表6 各選択肢の分類

	個人・家族に関わるもの	地域や組織に関わるもの
寺院の訪問機会	永代経 ¹⁴⁾ 、お彼岸 ¹⁴⁾ 、法事、墓参り、個人的な相談、年末年始	報恩講、同朋会、五日講、総代会、婦人会
神社の訪問機会	初詣、お宮参り、七五三、厄払い、日常の参拝、願掛け	お祭り、役員会

類に従って整理し直したものが図6、図7である。図の上部には「個人・家族に関わるもの」の項目を、下部には「地域や組織に関わるもの」の項目を配置する。前項同様、棒グラフの上段には回答者本人を、下段には他出家族のデータを示す。

まず、寺院への訪問機会について、図6より検討したい。回答者本人に注目すると、図6の下部に示す「報恩講」、「五日講」など「地域や組織」に関わる項目が80%以上と高い数値を示す一方、「個人・家族」に関わる項目は「永代経」の

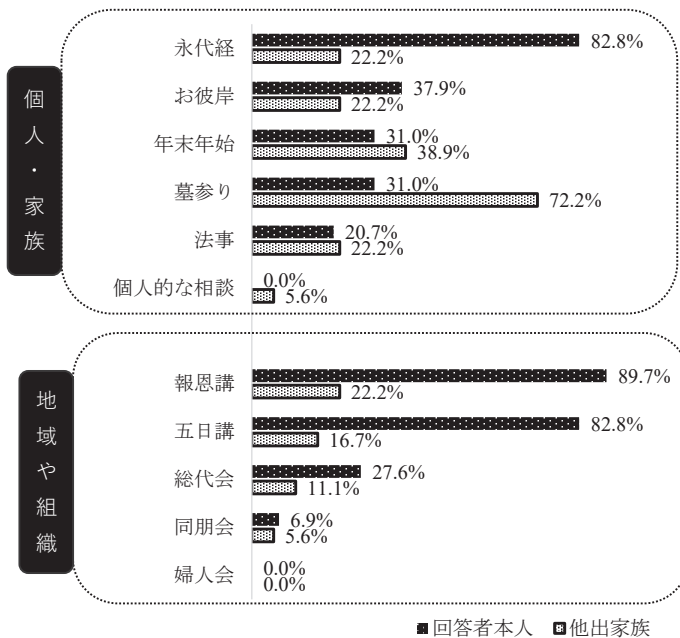


図6 寺院への訪問機会の二分類

み80%を超えるが、「お彼岸」、「年末年始」、「墓参り」といったそれ以外の「個人・家族」に関わる項目は30%台である。ここから、回答者本人に関しては、「報恩講」や「五日講」をはじめとする「地域や組織」に関わる機会に寺院を訪問する割合が高いと言える。報恩講および五日講は、門徒が浄土真宗の信仰を自覚する重要な機会であるとともに、門徒が手次寺以外にも美東地域の他の真宗寺院を訪れる機会となっている。これらの行事は手次寺とその門徒といった枠組みを越えて、住民同士の交流を促し、さらには地域としてのまとまりを維持していくことに寄与する。

他出家族の場合は、「個人・家族」に関わる機会に寺院やお参りをする傾向がある。最多は「墓参り」の72.2%である¹⁵⁾。次いで「年末年始」の38.9%が続き、「永代経」、「お彼岸」、「法事」はともに22.2%となる。「墓参り」、「永代経」、「お彼岸」はいずれも、家の系譜に属する死者を縁にして行われるものと見なせることから、死者という存在をきっかけにして、村落内外の家族が寺院や墓に集まっていると言える。他出家族による「墓参り」と「年末年始」への参加率の高さは、他出家族の多くが帰省する時期と重なることにより説明がつく。

また、他出家族は「地域や組織」に関わる機会にも寺院を訪れている。「報恩講」は22.2%、「五日講」は16.7%、「総代会」は11.1%、「同朋会」は5.6%の参加が見られる。これらは、「個人や家族」に関わる項目に比べて高い数値ではないものの、一部の他出家族が美東地域に帰省する機会になっている。

続いて神社への訪問機会について図7より検討する。神社への訪問機会の項目のうち、「地域や組織に関わるもの」に分類したのは「お祭り」と「役員会」である。「お祭り」は回答者本人(78.6%)、他出家族(56.5%)ともに神社への訪問機会として高い割合を示している。人口減少地域における祭りと他出家族については、居住者と他出者のいずれもが関わることによって、形態や運営のあり方を変容させながらも祭りが維持・継続される事例が報告されている(大久保・田中・井上2011)。今回のアンケート調査では、どのような祭りにいかなる形で他出家族が関わっているのかが不明であるが、祭りは他出家族の帰省を促すひとつの機会であり、他出家族が美東地域の住民と交流をもつ機会、すなわち地域の内外に暮らす者どうしの紐帯に寄与していることは指摘できるだろう。一方、「役員会」は居住者のみが関わりをもっていた。

「個人・家族に関わるもの」に分類した項目のうち、家族の紐帯と強く関わっ

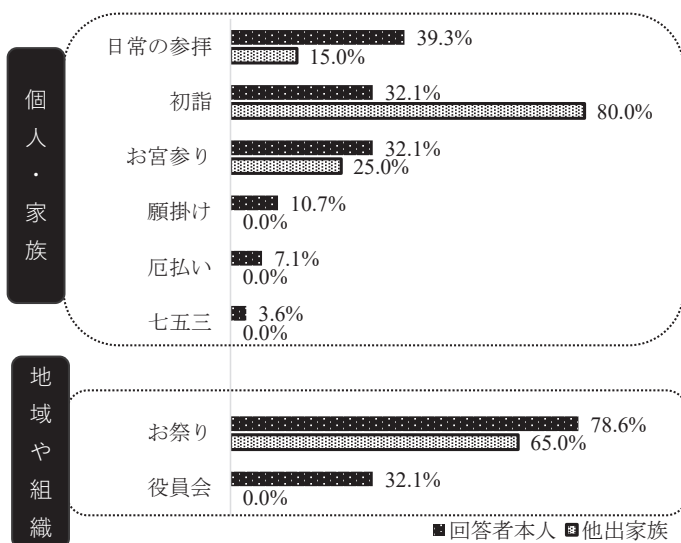


図7 神社への訪問機会の二分類

てくるのは「お宮参り」、「七五三」である。「お宮参り」と「七五三」については、前項でも述べたように出生に関わる儀礼である「お宮参り」のみ他出家族の神社への訪問がみられ（32.1%）、祖母が儀礼において役割をもつことから他出家族の帰省が促されていると考えられる。人生儀礼において出身地の氏神に参ることが必ずしも重視されなくなった現代においても、「お宮参り」は家族にも地域にも紐づく宗教行事として残っていると言える。一方、「七五三」や「厄払い」、「願掛け」は、他出家族にとっては場所を問わない宗教行事となっていると考えられる。

4.3 自由記述にみる寺院・神社の役割

ここでは、「お寺や神社に対する思いや不安」に関する自由記述を分析する。自由記述を直接引用する際には鍵括弧で括り、丸括弧内は回答者の性別と年代（アンケート回答時の年齢を基準とする）を示していく。

まずは、寺院に対する意見について行事に注目して見ていく。「お寺での説教でのお話は、人生を豊かに暮らすためのヒントが多く含まれていると感じました。とても感謝しています。報恩講、永代経、五日講は、仏教にふれる良い機会であると思います（50代男性）」といった声があった。ここでは、寺院行事が

「仏教¹⁶⁾」にふれる機会と見なされており、回答者にとって肯定的なものとして捉えられている。また、「五日講など春日ならではの行事は守り、残していきたい気持ちです(40代女性)」といった声からは、寺院行事は地域の伝統であり、守るべきものとして認識されている。しかしこの40代女性は、行事の運営に多大な労力を要する現状の形のままで、維持が困難であると述べる。「実際には毎月五日に仕事を休んでお参りしたり、煮番に行くことは(特に若い人は)困難であるし、団家(ママ)が減り、煮番の金銭的負担も大きいため、今まで同様の規模や方法での継続は難しいと感じています。規模は小さくしてでも新しい形で継続していければ…と強く思います(40代女性)」。同様に、「現在続いている五日講も食事はなくしても続けて行かねばなりません(80代男性)」と、寺院行事を存続するために簡素化を提案する者もいる。

厳しい状況にあるのは神社も同様である。「神社につきましても交代でお庭の掃除や維持管理をしています若くは若い人の数が少ないのが大変です(80代男性)」として、人口減少と高齢化が進行する中で、神社の本殿や境内の維持・管理をめぐる困難に関する声が見られる。そして、「神社のことは継続しないと村の『力』が失われると思っています(40代女性)」という記述より、神社の維持・管理を継続できることは、地域の活力を維持することにもつながると認識されていることが分かる。

今度は、寺院と神社に共通して寄せられた意見を見ていきたい。「信仰心でお参りに来られているのかテーマパークの様に来られているのか不思議に思うことがあります(50代女性)」として、人々が寺院や神社へ訪問する背景には必ずしも信仰心があるのではなく、信仰心がなくとも訪問される場合が見受けられることを指摘している。その上で、「守りをされなくなった神社やお寺を見つけると神仏への信仰の薄れを(ママ)懸念を抱きます。親鸞聖人のように、人々に教えを説く場、教えを乞う人の場が、過疎化により、担い手がなくすたれていってしまう現象に不安が募ります。村の方々の精神的支えになっている所もあると思うので存続して欲しい(50代女性)」と述べる。ここでは寺院や神社といった宗教施設が、信仰対象としての神仏と関わり、「教え」が授受される場として捉えられている。また、そうした宗教施設の維持に尽力してきた村内の人々の数が現在減少し、信仰の場の存続ができなくなることへの不安が述べられている。このように、寺院や神社といった宗教施設は、住民にとって、「精神的支え」と

して人々がその地域で生きていく上での意味を付与するものとして機能していることが見て取れる。

ただし、美東地域における宗教施設への訪問を考える上では、美東地域の地理的特性を考慮する必要がある。「お寺参りについてはその地にある寺の位置にもよりまして坂のある所、又車の行けない所、家から遠い人共、それぞれで町の様に平地にある寺とは一緒に考えないで下さい(80代男性)」。ここで指摘されているように、美東地域に位置する寺院の中には、狭くて急な坂をのぼらなくては訪問できないものや、本堂の屋根からの落雪が危険なために冬季は通行止めになる私道を一部有するものが見られる。また、美東地域にはコミュニティバス(デマンドバス)が走行しているものの本数には限りがあり、公共交通機関に限って言えば交通の便に恵まれているとは言い難い。こうした地理的条件や交通の便に恵まれていないといった事情は、人々が宗教施設を訪問することを困難にするだろう。

自由記述の分析により指摘できることは以下の通りである。宗教行事の実施は、個々人が宗教的教義との接点を持つ機会を提供するとともに、地域の伝統を継承していく場としても機能している。人口が減少し高齢化が進む中で宗教施設の維持管理や宗教行事の運営の負担は大きくなっているが、それでも寺院や神社は地域の人びとの「精神的支え」という側面をもち、地域の活力の維持にとって重要なものであると認識されている。

5. おわりに：人口減少地域における寺院・神社の役割

本稿では、岐阜県揖斐川町春日地区美東地域の住民を対象に実施したアンケート調査の結果をもとに、人口減少地域における寺院と神社の役割を検討してきた。今回の調査では、村内の居住者と他出家族それぞれについて宗教施設への訪問機会となる具体的な行事・機会を尋ねることで、寺院と神社とでは、宗教施設と人々の関わり方が異なることが明らかになった。まず寺院は、「家」という単位¹⁷⁾(家族の一員として生者のみならず死者を含む)と親和性をもつことに特徴づけられ、家の系譜に基づく死者の存在を契機としながら村落内外の家族が集う場(墓参り、永代経、お彼岸)に関与している。また寺院は、居住者および他出者が、地域・組織の行事への参加という形をとって関わる側面(報恩講、五日講など)も持っている。次に神社は、お祭りへの回答が突出していたように地域

行事の場としての側面が確かに目立つものの、日常の参拝や人生儀礼など個人や家族としての関わりも少なくない。前者への居住者の参加の仕方は、村における「一軒前の家」を単位としている可能性が考えられるが、後者への関わり方はより個人化されており、「家」を単位とするのではなく今生きている者によって構成される「家族」や個人を単位としていることが読み取れた。そして、寺院と神社いずれにおいても、行事や訪問機会の性質によっては、他出家族が美東地域に帰省する契機となっていることが明らかになった。

さらには、宗教施設への訪問を通して、村内の新旧居住者の交流が促されることもある。約20年前に他地域から美東へ移住してきたHさん(40代女性)は、夫と子と共に暮らしているが、移住後5年程経った頃、地域の人から報恩講と一緒にいかないかと誘われたという。

(寺院行事の担い手) なんかも減ってるし、若い人もいないし、ちょっと来てみないか(と)。……もちろんお客さんとして行って、でも子どもがいるから……よく来てくれた、若い子が寺に来てくれるなんてとか、子どもの声が響いてるといいなみたいな、そういう感じがすごいあって。……人数がどんどん減ってるので、一人でも貴重な作業の手っていうか、……で、もう檀家にもなりました。(2022年6月19日Hさんへの聞き取り調査)

また、移住者Hさんは、寺院行事(報恩講)に参加する以前に、住民から神社の祭りに一緒にいかないかと声をかけられている。Hさん家族は、最初の年は祭りを見るだけだったが、翌年からは奉納の踊りである「太鼓踊り」に参加するようになった。

(祭りには) 男子しか関われないから、主人とあと男の子が2人いる……(この地域では) かなり貴重なことになりますよね。すごく喜んでもらったというか、受け入れてもらったんですね。……祭りにあたっていろんな準備とか……村の人に聞いたり、話したり、頼まれたり、一緒に作業することがすごくあったんです。(2022年6月19日Hさんへの聞き取り調査)

こうしたHさんの事例は、宗教行事が、新住民を地域住民の一人として地域に迎え入れるひとつの機会であることを示している。すなわち、寺院や神社は宗教行事の実施を通して、地域社会及び門信徒組織や氏子組織の紐帯を維持したり強化したりする役割を果たしていると言える。人口減少地域における宗教施設は、古くから当地域に住む住民や他出家族のみならず、移住者にとっても地域との結びつきを提供するものとして機能しうる。

最後に、春日美東地域における宗教動態の研究を発展させるための課題について述べる。第1に、今回のアンケート調査は春日美東の地域住民が回答者であるため、他出家族に関するデータは間接的なものであるという限界がある。当該調査地において実際に他出家族による宗教施設への訪問状況がどのようなものであり、どのような関わり方をしているのか、他出家族に直接アプローチする調査が必要である。第2に、訪問機会の各項目に対する評価・認識の問題が挙げられる。本稿においては、筆者らが分析者としての視点から行事の性格に基づいて「個人や家族に関わるもの」と「地域や組織に関わるもの」の2つに分類した。しかしながら、住民の各行事に対する理解や認識は不明なままである。例えば「報恩講」や「永代経」は、浄土真宗の教義に基づく宗祖や仏縁に対する報恩感謝の行事として説明できるものの、実際にはいくつもの側面（先祖の供養、地域住民による寺院護持、地域の慣習など）を持っていると考えられる。したがって、各行事の趣旨や位置づけについて春日美東の地域住民がどのように認識しているのかを今後さらに検討していく必要がある。また、宗教施設を訪問する機会のひとつである「お祭り」がいつの時期に行われるどのような祭りを指すのかを本アンケートから知ることはできない。よって、こうした各行事の実態は、住民およびその他出家族への聞き取り調査を通して把握することが必要である。

【謝辞】

本稿の執筆にあたっては、岐阜県揖斐川町春日美東の住民の皆さまをはじめ、多くの方々のご協力、ご助言をいただきました。ここに篤くお礼を申し上げます。

【註】

- 1) 中條はほかに「他出者」の語を用いて、老親が死去して出身村との縁が薄くなっている人々についても注目している（中條2017：140）。

- 2) 広島県三次市作木町を事例に、他出子の居住地域ごとに仏事への関与のあり方を検討した結果、遠方(関西圏・首都圏)に住む他出子は、集落住民に関わる葬儀や法事ではなく、あくまでも実家に関わるものに限定される傾向にあるとされる(中條 2017: 134)。
- 3) 徳田・山下・松岡(2019)で述べられているように、本稿で事例として扱う春日地区の場合、「他出家族」の多くは周辺地域に留まる傾向がみられ、郷里の親などが健在な間は美東地域への帰省頻度は低くはない。
- 4) 浄土真宗の宗祖、親鸞聖人の命日忌である「報恩講」は、宗祖への恩徳を感謝するために開かれる法会であり(中村・福永・田村・今野・末木編 1989: 904)、門徒社会においては年間最大の祝い事である(長沢 2014: 414)。
- 5) 表1では神社に関して、社格が「無格社」であるものは省いて表記している。
- 6) アンケート調査に先立って、美東地域の各寺院に対してアンケート調査の実施について電話で連絡した。その際、住職らは調査票への回答が不要であることを説明した。
- 7) 「はがきタウン」および「タウンプラス」とは郵便局が提供しているサービスであり、宛名の記載を省略した郵便物を指定した地域の全世帯に郵送することができるというものである。
- 8) 揖斐川町の一セ帯当たりの人員数について、2020年の結果を参照すると、2.71人である(揖斐川町HP)。
- 9) 回答者本人に寺院訪問機会を尋ねる選択肢に、「誰も行かない」を追加した全13項目である。
- 10) 美東地域における墓は、必ずしも寺院境内に設置されているわけでないことと関係すると考えられる。例えば、C寺では2015年に本堂裏手に永代供養墓を建てたが、美東のその他の寺院境内には現状、墓がない状態が続く。人々は屋敷や私有林の一角のほか、地域の共同墓地に立地する墓へ死者を埋葬している(本林・磯部 2020: 1-8)。
- 11) 回答者本人の場合は、「報恩講」・「永代経」・「五日講」の参加率に比べて「お彼岸」・「法事」の参加率は半分以下になっている。
- 12) 「祭り」はその語源に立ち返ると、「神の来臨を乞い待ち、奉獻し、服従する」ことを意味するとされるが、我々が最も想起しやすいものとしては、「村や町の氏神、産土もしくは鎮守の祭りであり、地域社会の祭り」が挙げられる(芦田 2019: 554)。本稿において「祭り」は、毎年のように決まった日時に、神社を会場に営まれる神を祀る儀式と、それに伴って催される神楽などの諸行事を指すこととする。当地域における代表的な祭りの一つとして「太鼓祭り」が挙げられるが、これは「春日の太鼓踊り」として岐阜県重要無形民俗文化財に指定されており、秋に実施されている(俵木 2008: 43)。
- 13) 回答者本人に神社訪問機会を尋ねる選択肢に、「誰も行かない」を追加した全10項目である。
- 14) 「永代経」および「お彼岸」の位置づけは、教義的な文脈と地域住民との意識とでは乖離があると考えられるが、今回は試論的に「個人・家族に関わるもの」として分類する。
- 15) 他出家族の7割以上が「墓参り」を行っていることから、一見すると、他出家族の寺院訪問を促進する重要な契機として、墓参りは捉えられるように思われる。しかし当地域では、墓参の実施が寺院の訪問に直接結びつくとは限らないことに注意する必要がある。3-1でも触れたように、当地域において寺院境内に墓を有するケースは稀であり、墓参りのついでに寺院を訪問する姿を想定することは容易ではない。

- 16) ただし、ここで言う「仏教」が、仏や親鸞、教如の教えといった意味合いを持つものなのか、先祖供養としての仏教に接近するといった意味合いなのか、本アンケート調査の結果からは判断できない。
- 17) 「家」とは、生産と生活を中心とする共同関係であり、先祖から子孫へと超代的に連続する社会単位として位置づけられる。家長夫婦を核に、その子どもやきょうだいなどが中心的な成員であるが、奉公人など非親族の成員を含む場合もある。「家」は、家産・家業・家名・墓などを保有してきた。しかし高度経済成長期以降、産業構造が変容し、「家」を日本社会の基礎的な集団として捉えられることはなくなっていった（大野 2014：244-5）。

【参考文献・資料】

- 芦田徹郎，2019，「祭祀文化と神社神道」日本社会学会社会学事典刊行委員会編，『社会学事典』丸善書店，554-555。
- 阿部友香・野村実・丸山真央，2022，「コロナ禍の中の地域社会学の研究実践と教育実践—(2) フィールド調査をめぐって—」『地域社会学会ジャーナル』5：14-20（第3節「ビデオ通話アプリケーションを用いた高齢者へのオンライン聞き取り調査の試み」16-19）。
- 相澤秀生・川又俊則編，2019，『岐路に立つ仏教寺院』法蔵館。
- 岐阜県社会福祉協議会，2021，岐阜県社会福祉協議会ホームページ，（2021年6月29日閲覧，<https://www.winc.or.jp/shicyoson/>）。
- 冬月律，2019，『過疎地神社の研究—人口減少社会と神社神道—』北海道大学出版会。
- 揖斐川町ホームページ，「統計からみた揖斐川町の現状」（2023年8月8日閲覧，<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/289342.pdf>）。
- 一般社団法人岐阜県産業環境保全協会ホームページ，（2023年9月25日閲覧，<https://www.gifu-hozen.jp/file/area.pdf>）。
- 石井研士，2015，「神社神道と限界集落化」『神道宗教』237：1-24。
- 伊藤高弘・窪田康平・大竹文雄，2016，「寺院・地蔵・神社の社会・経済的帰結—プログレスレポート—」『行動経済学』9：102-105。
- 春日村史編集委員会，1983，『春日村史（下）』。
- 川又俊則，2023，「仏教寺院における教化活動の特徴—多宗派質問紙調査にみる年中行事と法話を中心に—」『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編』6：89-98。
- 木越康・東館紹見・山下憲昭・徳田剛・藤枝真・藤元雅文，2018，「地域社会と寺院の抱える問題点の研究—課題と分析視角—」『真宗総合研究所研究紀要』34：1-21。
- 本林靖久・磯部美紀，2020，「地域社会における真宗寺院の現状と課題—岐阜県旧春日村の墓制と葬儀の変遷を通して—」『真宗総合研究所研究紀要』36：1-23。
- 長沢利明，2014，「霜月祭りと太子講」民俗学事典編集委員会『民俗学事典』丸善出版，414-415。
- 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士編，1989，『岩波仏教辞典第2版』岩波書店。
- 中條曉仁，2017，「過疎地域における寺檀関係の持続可能性—他出子の動向に注目して—」『教化学研究』8：120-136。

- 大久保実香・田中求・井上真, 2011, 「祭りを通してみた他出者と出身村とのかかわりの変容—山梨県早川町茂倉集落の場合—」『村落社会研究ジャーナル』17(2): 6-17
- 大野啓, 2014, 「家とイエ」民俗学事典編集委員会編『民俗学事典』丸善出版, 244-5.
- 櫻井義秀・川又俊則編, 2016, 『人口減少社会と寺院—ソーシャル・キャピタルの視座から—』法蔵館.
- 総合佛光大辞典編集委員会編, 2013, 『総合佛光大辞典 第3版』法蔵館.
- 総務省統計局ホームページ, 「世帯の種類」(2022年5月25日閲覧, <https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/users-g/word2.html?msckid=5615919ccf5111ec9abcb41c37c8c8d>).
- 多田正治・横田隆司・飯田匡・伊丹康二, 2021, 「神社・寺院の維持管理と行事運営の実態に関する研究—三重県熊野市を対象として—」『日本建築学会計画系論文集』86: 1892-1902.
- 高橋嘉代, 2005, 「寺院行事と檀家組織からみた寺檀関係の実証研究: 宮城県仙台市泉区の事例」(博士論文)
- 俵木悟, 2008, 「春日の太鼓踊り」日本青年館公益事業部編『民俗芸能』89: 38-52.
- 徳田剛, 2018, 「『過疎と寺院』問題をどう捉えるか—モビリティ論の視点から—」日本宗教学会第77回大会(於: 大谷大学), 開催校特別企画②「人口減少時代における地域と寺院のあり方研究」報告資料.
- 徳田剛・山下憲昭・松岡淳爾, 2019, 「中山間地域に立地する真宗寺院の現状と課題—人口動態と他出子対応の視点から—」『真宗総合研究所研究紀要』35: 1-15.
- 刀根卓代, 2014, 「お宮参りと食い初め」民俗学事典編集委員会『民俗学事典』丸善出版, 284-285.
- ヤマシヨウ株式会社ホームページ, (2021年6月29日閲覧, https://eikounoayumi.jp/m/map_illust/chubu/gifu/seino.html).

本稿は、2021年度より進められている大谷大学真宗総合研究所・一般研究木越班「人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究」(科学研究費助成事業・基盤研究(C)、21K00075)の研究成果の一部を報告するものである。

【資料：調査票】

Ⅱ. あなたと同居しているご家族についておたずねします。

(3) 同居しているご家族がいますか。該当するものに○をつけてください。

1. いる ➡ (4)へ 2. いない ➡ (5)へ

(4) 同居しているご家族の続柄、性別、年齢を教えてください。

続柄と性別は該当するものに○をつけ、年齢はおおよそで結構です。

	続柄	性別	年齢
例	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	79 歳
1	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	歳
2	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	歳
3	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	歳
4	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	歳
5	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	歳
6	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	歳
7	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	歳
8	きょうだい・夫・妻・子・孫・その他	男・女・無回答	歳

ここからは、新型コロナウイルス流行（2020年2月）以前の
お寺や神社への関わり方についてお答えください。

Ⅲ. あなたとお寺の関わり方についておたずねします。

(5) コロナ禍以前、あなたはどれくらいお寺に行く機会がありましたか。

該当するものに○をつけてください。

1. ほぼ毎日 2. 週1～2回 3. 月1～2回
4. 半年に1～2回 5. 年1～2回 6. ほとんど行かない
7. 全く行かない

地域と寺院に関するアンケート調査にご協力をお願いします。

記入に際してのお願い
1. このアンケート調査は、春日地区美東に在住の全戸を対象に、実施しております。
2. 回答は、現在、美東在住で、ご当家で最も長くお住まいの方をお願いします。ご本人が記入できない場合は、ご家族や介護の方による代筆でも結構です。
3. 回答の内容はすべて統計的に処理し、調査目的の以外に使用することはありません。
4. 回答いただいたアンケート用紙は、同封の返信封筒（切手不要）に入れ、2022年1月28日（金）までにご返函ください。
大谷大学 真宗総合研究所
研究代表 木越康（教授）
【お問い合わせ先】
電話：075-411-8030（平日 14:40～16:10 ※12/28～1/4 を除く）
メール：fujino-1090@res.otani.ac.jp
※担当：藤元雅文（本学教員）

1. あなた自身についておたずねします。

(1) あなたの性別をお答えください。該当するものに○をつけてください。

1. 男性 2. 女性 3. 無回答

(2) あなたの生まれた年と、年齢をご記入ください。

大正・昭和・平成 年生まれ 歳

(6) あなたはどのような機会にお寺やお参りに行きますか。

該当するものすべてに○をつけてください。

1. 報恩講
2. 同朋会
3. 五日講
4. 永代経
5. お彼岸
6. 総代(役員)会
7. 婦人会
8. 法事
9. 墓参り
10. 個人的な相談
11. 年末年始(除夜の鐘など)
12. その他()

(7) 家(イエ)のご遺骨はどこに納められていますか。

該当するものすべてに○をつけてください。

1. 本山納骨(東本願寺、真宗本願取骨、大谷祖廟納骨など)
2. お寺(手次寺)の境内にある家墓、納骨堂
3. お寺(手次寺)の境内にある惣墓(合葬墓、永代供養墓など)
4. 村や地域の共同墓地にある家墓
5. 村や地域の共同墓地にある惣墓(合葬墓、永代供養墓など)
6. 村の私有地にある家墓
7. 美東以外にある家墓、納骨堂
8. 美東以外にある惣墓(合葬墓、永代供養墓など)
9. その他()

(8) あなたはどれくらいの頻度で(7)の場所に行きますか。

該当するものに○をつけてください。

1. ほぼ毎日
2. 週1~2回
3. 月1~2回
4. 半年に1~2回
5. 年1~2回
6. ほとんど行かない
7. 全く行かない

IV. 神社との関わり方についておたずねします。

(9) コロナ禍以前、あなたはどれくらい神社に行く機会がありましたか。

該当するものに○をつけてください。

1. ほぼ毎日
2. 週1~2回
3. 月1~2回
4. 半年に1~2回
5. 年1~2回
6. ほとんど行かない
7. 全く行かない

(10) あなたはどのような機会に神社を訪れますか。

該当するものすべてに○をつけてください。

1. 初詣
2. お宮参り
3. 七五三
4. 厄払い
5. お祭り
6. 日常の参拝
7. 願掛け
8. 役員会
9. その他()

V. 美東から離れて暮らすご家族(きょうだい・子)についておたずねします。
ご存命の方についてのみご回答ください。

(11) 美東を離れたご家族について、籍柄、性別、およびその年齢、居住地、コロナ禍以前の美東への帰省頻度を教えてください。
また、帰省時に宗教施設(お寺や神社、墓など)を訪れる場合には最後の欄に○を記入してください。

続柄	性別	年齢	居住地	コロナ禍前の帰省頻度	宗教施設への訪問
きょうだい ・子	男・女・無回答	80 歳位	大垣市	1. ほぼ毎日 2. 週1~2回 3. 月1~2回 4. 半年に1~2回 5. 年1~2回 6. 少ない	○
1 きょうだい ・子	男・女・無回答	歳位		1. ほぼ毎日 2. 週1~2回 3. 月1~2回 4. 半年に1~2回 5. 年1~2回 6. 少ない	
2 きょうだい ・子	男・女・無回答	歳位		1. ほぼ毎日 2. 週1~2回 3. 月1~2回 4. 半年に1~2回 5. 年1~2回 6. 少ない	
3 きょうだい ・子	男・女・無回答	歳位		1. ほぼ毎日 2. 週1~2回 3. 月1~2回 4. 半年に1~2回 5. 年1~2回 6. 少ない	

※記入欄は次ページにもあります。

Ⅶ. お寺や神社に対する思いについておたずねします。
 (14) お寺や神社に対する思いや不安などがあれば、お聞かせください。

質問項目は以上です。ご協力ありがとうございました。

今後の調査にご協力いただけます場合には、お名前とご連絡先をご記入ください。記入は任意です。

お名前 _____
 ご住所 _____
 お電話番号 _____

続柄	性別	年齢	居住地	コロナ禍前の参拝頻度	宗教施設への訪問
4	きょうだい ・子	男・女・未婚者 歳位		1. ほぼ毎日 2. 週1～2回 3. 月1～2回 4. 半年に1～2回 5. 年1～2回 6. 来ない	
5	きょうだい ・子	男・女・未婚者 歳位		1. ほぼ毎日 2. 週1～2回 3. 月1～2回 4. 半年に1～2回 5. 年1～2回 6. 来ない	
6	きょうだい ・子	男・女・未婚者 歳位		1. ほぼ毎日 2. 週1～2回 3. 月1～2回 4. 半年に1～2回 5. 年1～2回 6. 来ない	
7	きょうだい ・子	男・女・未婚者 歳位		1. ほぼ毎日 2. 週1～2回 3. 月1～2回 4. 半年に1～2回 5. 年1～2回 6. 来ない	
8	きょうだい ・子	男・女・未婚者 歳位		1. ほぼ毎日 2. 週1～2回 3. 月1～2回 4. 半年に1～2回 5. 年1～2回 6. 来ない	

※記入欄が足りない場合は、最終ページの記入欄に続きをお書きください。

(12) 美奈を離れたご家族は、帰省時、どのような機会にお寺やお参りに行きますか。該当するものすべてに○をつけてください。

- 1. 報告講 2. 同朋会 3. 五日講 4. 永代経
- 5. お彼岸 6. 総代(役員)会 7. 婦人会 8. 法事
- 9. 墓参り 10. 個人的な相談 11. 年末年始(除夜の鐘など)
- 12. 誰も行かない 13. その他 ()

(13) 美奈を離れたご家族は、帰省時、どのような機会に神社を訪れますか。該当するものすべてに○をつけてください。

- 1. 初詣 2. お宮参り 3. 七五三
- 4. 厄払い 5. お祭り 6. 日常の参拝
- 7. 願掛け 8. 役員会 9. 誰も行かない
- 10. その他 ()